脱物質主義的価値と新しい社会運動

Post-materialistic Values and New Social Movements

渡辺 伸一

WATANABE Shinichi

The concept of “post-materialistic” values has been, either positively or negatively, adopted by scholars who study “new social movements”. Undoubtedly, this implies that the concept has become an essential vehicle to analyze the sense of values and attitude in new social movements. The primary object of this paper is to summarize how this concept, as a conceptual instrument, has made a great impact on the process of analyzing social movements and “new politics”. But I disagree to apply the concept, as Inghart's definition remains intact, to comprehend the meaning of new social movements. In this paper I wish to propose the new interpretation of “post-materialistic” value while removing a negative influence of the Maslovian linear theory on Inghart's concept.

1. はじめに

「脱物質主義的」価値（以下、「脱物質的」価値）という概念は、エコロジー運動を初めとするいわゆる「新しい社会運動」を研究している論者が、積極的にであれ消極的にであれ、もちいる概念となっている。いうまでもなくこのことは、新しい社会運動を分析、理解しようとするために「脱物質的」価値という概念が不可欠であるということを示している。本稿の目的の第1は、この概念が新しい社会運動論あるいは「新しい政治」（new politics）を分析する概念装置として、いかに大きなイムパクトを与えてきたかを整理すると同時に、若干の検討を加えることにある。

ところで、私は、このR. イングルハートの「脱物質的」価値⁽¹⁾を、新しい社会運動の価値観や態度を分析する概念としてもちいることには賛成だが、しかし、イングルハートが定義した“そのまゝの内容で”使用するのには反対である。なぜなら、彼が提起した「脱物質的」価値という概念は極めて一般的な意味で提出されたものであって、それをそのまま借用して、新しい社会運動を導く固有の価値観だとするのは、あまりにも粗雑な手続きというほかなく、無視できない問題点を内包してしまうと考えるからである。にもかかわらず、多くの論者にはそのことが自覚されていない。したがって、こうした手続きのどこに問題点があるかを明らかにし、イングルハートのいう「脱物質的」価値と新しい社会運動を導く価値としてのそれ（＝＜脱物質的＞価値）との違いを明確にさせる必要があると考える。これが、本稿の第2の目的である。

まず、もはや周知のこととはいえ、イングルハートによる「脱物質的」価値の定義を確認することから始めたい（第2章）。つづいて、この概念が新しい社会運動分析に与えた

インパクトを3つの視角から整理する(第3章)。この作業をふまえ、第4章では新しい社会運動を導く価値としての「脱物質的」価値を再定式化し、「脱物質的」価値と<脱物質的>価値との相違の明確化を試みることにしたい。⁽²⁾

2. イングルハートの「脱物質的」価値

アメリカの社会学者R. イングルハートは『静かなる革命』(Inglehart, R. 1977=1978)のなかで、1960年代後半以降、西洋の産業社会の人々の価値意識や政治意識が物質的豊かさから精神的豊かさへと向かっているという点を指摘し、この変化を「物質主義的」価値(以下、「物質的」価値)から「脱物質的」価値への転換と表現した。イングルハートが、この新しい価値意識の形成を把握する際に依拠したのは、A. マズロー (Maslow, A. H. 1954=1971)の欲求段階説であったが、それは、マズローの研究がある条件のもとで価値観変化が進行する特定の方向を示唆していたからであった(Inglehart, R. ibid:24)。

マズローによれば、所得と消費財の豊かさにおいて、相対的に高いレベルを確保することに成功した社会では、そうした所得や物質の豊かさがわれわれに生活への満足を与えることはより少なくなるという。そのことを、彼は周知の「欲求の五段階説」という形で展開した。これによると、そのもっとも低次の第1の段階に位置するのは「生理的欲求」であり、食欲、性欲がその代表例にあたる。第2の段階は「安全の欲求」で、敵意をもった驚異を与える世界の中で安全性、安定性を求めることを意味する。しかしひとたび、経済上、身体上の安全を獲得すると、次は物質的でない他の目標や欲求を追求し始める。すなわち、「愛、帰属、尊敬への欲求」が次第に重要になってくる。そしてさらにこれらが満たされると、知的ならびに美的満足と結び付いた欲求＝「自己実現」がクローズアップされる。「この最後の欲求群にははっきりした序列はないようであるが、しかしはっきりしていることは、個人が物質的欲求や帰属欲求といった低い段階の欲求を満足させて後はじめて、これら高次の欲求が出現するということである。」(Inglehart, R. ibid:25)

イングルハートは、こうした心理学的なマズローの仮説を社会や政治との関わり合いの中でとらえ、欧米諸国の政治意識や価値の変容分析に応用して検証を試みたのであった。

図1は、彼が各項目によって探ろうとした基本的欲求を示している。「六つの項目は生理的ないし物質主義的欲求に対する強調を探ることを意図していた。すなわち、『物価の上昇』『経済成長』『経済の安定』は、生存欲求を目的とし、『秩序の維持』『犯罪との戦い』『強力な防衛力』は、安全欲求を目的としていた。残りの六項目は種々の『脱物質主義的』欲求を探ることを意図していた。われわれは後のほうの欲求を潜在的には普遍的であると考ええる。つまり人間誰しも尊敬への欲求、本来的に備わる知的好奇心への欲求、美的満足への欲求をもっている。そして、環境の影響でそれらが窒息させられないかぎり、人々はこれらの欲求に基づいて行動するだろう。別の表現をすれば、『人はパンのみに生きるにあらず』ということになる。とりわけ、パンを十分にもっている場合にはそうである。それゆえに、われわれの予想としては、六つの物質主義的項目に対する強調は、それ自体一つの群をなす傾向を帯びるであろうし、脱物質主義的項目も別のはっきりした一群を形成するだろうということである。」(ibid:44)

【図-1】イングルハートの調査項目とそれが探ろうとした欲求 『静かなる革命』, 44頁

こうして、イングルハートは、物質的に豊かな時代に成長した人々の間には、「物質的」価値から「脱物質的」価値への転換が起こっていることを検証する。たしかに、60年代の熱狂的な政治的ラディカリズムは、70年代以降表面上は沈静化したように見える。が、実のところはその裏で産業社会全体にわたって政治生活を徐々にではあるが根本的に変えてしまう事態が進行している。「脱物質主義的なものの考え方は、社会の根本的再組織化を意味している」のである (ibid:283)。イングルハートは「脱物質的」価値への価値転換の意味をこう捉え、『静かなる革命』と表現したのであった。

彼の提出した「脱物質的」価値という概念は、こうして社会学のみならず政治学においても新しい価値意識や政治意識の特徴をあらわすキイタームとして、その後の研究に大きな影響を与えていくことになったが、この概念がとくに今日の運動論へあえたインパクトを、3点に絞って整理してみると次のようになろう。

・構造と価値。新しい社会運動の発生の背景説明として、「脱物質的」価値は社会の構造的側面からのものと同時に一つの有力な論理であった。

・相対的剥奪感と「脱物質的」価値。「危機の運動」(Kerbo, H. R., 1982) 分析にすぐれていた「相対的剥奪」「不満」といった概念では、新しい社会運動を導く心理的要因を捉えきれなくなり、ここに「豊饒の運動」を支える新しい心理的メカニズムを分析する概念が要請された。

・担い手論と「脱物質的」価値。「新しいタイプの運動の担い手は誰か、そしてそれはなぜか」という問いと「脱物質的」価値はきわめて密接に関連していた。つまり、担い手論に論争的テーマを投げ掛けた。

以下、この順に従ってみていこう。

3. 新しい社会運動と「脱物質的」価値

(1) 構造と価値

新しい社会運動研究者がこぞって抱いた関心は、「なぜ」新しいタイプの社会運動が発

生するのか、という問いだった。これを大雑把に整理すると、2つの方向からの議論に集約できる⁽³⁾。それは、①既存の「旧い政治」や国家の機能不全からの説明と、②新しい価値観の生成とそれに基づいた新しい要求の出現からのものである。多くの論者は、それぞれニュアンスを異にしながらもこの2つの論点を議論に組み入れている。

①の議論をC. オフフェ (Offe, C., 1984, 1985)にしたがって整理するとだいたい次のようである。

1960年代後半まで先進資本主義国における戦後政治の構造的特質であった「ケインズ主義的福祉国家」は70年代に入ると、経済的・財政的危機に見舞われ「国家の機能不全」が生じる。経済領域や福祉、教育、地域開発等への国家の介入は、その巨大化によって負担過重を導き、国家の正当性創出力と統治能力の衰退を招いた。競争的政党民主制とインテレスト・ポリティクスを通じて、経済成長、物質的な分配の保証、軍事的・社会的安全、社会的管理を実現し、そのことで私的生活と物質的な生活の安定化を計るという戦後政治体制＝「旧い政治」は危機に直面したのである。ここに国家の機能転換や機能縮減の必要性を見て取り、「上から」対応しようとした試みが「ネオ・コーポラティズム」や「新保守主義」であったが、一方、同じ必要性を、国家による市民社会への介入に抵抗し、市民社会への国家の従属機能の拡充を要求することで達成しようとしたのが、先進産業諸国のエコロジー運動、反原発・平和運動、フェミニズム運動など全世界的規模の「新しい社会運動」／「新しい政治」の流れであった。「旧い政治」は、「生活の質」の問い直しや「生活様式の政治化」といった新しい争点を吸収できず、「新しい政治」の流れは「新しい社会運動」として顕在化したのである。

新しい社会運動はなぜ発生するか。それは「政治や国家の機能不全による」、というのが一つの論点である。

②他方、もう一つは、新しい社会運動の抬頭の原因として、諸価値の変化に着目するものである。これらは、マズローとイングルハートの議論に大きく依存したもののだが、山口はそれらをコンパクトに整理している。マズローによれば、「人間の基本的欲求は、生理的欲求－安全への欲求－帰属と愛への欲求－自他への敬意への欲求－自己実現の欲求、へと随時発展して行くという。低い段階の欲求が満たされると、その次の段階の欲求が強くなる、というわけである。衣食住といった最も基礎的な欲求の充足に必死であるとき、人は自由とか自己表現の仕方などといった問題で思い煩うことはない。生存のための最低限必要な物質的諸条件が充足されたときにのみ、人は他者からの敬意を気にしたり、民主的権利について考えたりする余裕をもてるようになる。新しい社会運動を導いてる欲求、あるいは価値——たとえば豊かな自然環境、生活スタイル、性的アイデンティティ、自己実現、参加、民主的権利、平和、等——も生理的欲求や安全への欲求といった、いわば物質的な基本的欲求が満足された後にあらわれてくる、脱物質的(post-materialist)、あるいは脱取得的(post-acquisitive)な欲求や価値である、ということができる」(山口, 1985:22-3)。

J. ハバーマスもまた新しい社会運動に着目し「『新しい』と言ったのは、生活の質や同権の問題、さらには個人的自己実現や参加、あるいはまた人権の問題が扱われているからである」と述べ、「この新たなタイプの抗争は、R. イングルハートが国民大多数の価値観や態度の変化をてがかりに立証した例の『静かなる革命』の現れである」(Habermas,

J., 1981=1987:412-3) としているのである⁽⁴⁾。

新しい社会運動あるいは「新しい政治」の背景分析には、こうして「構造」からの説明と「価値観」からの説明の双方が不可欠だった。そして、後者において、「脱物質的」価値という概念は最も重要なキーワードであったのである。

(2) 相対的剥奪と「脱物質的」価値

社会運動の発生基盤を社会心理学的に説明するモデルとしては、従来、相対的剥奪論が有力であった (Gurr, T. R., 1970; 曾根中, 1970; 塩原, 1976; 松本康, 1985 etc.)。しかし、「相対的剥奪」「不満」という概念は「危機の運動」分析には優れているが「豊饒の運動」にも適用できるかどうかは、大いに疑問とされるか、あるいは不十分とみなされた⁽⁵⁾。「相対的剥奪論は、政治的運動、暴力の幾つかの型を説明する際には価値あるものだが、しかし新しい社会運動という現象の本質を把握できるようには思われない」(Dalton, R. J., Kuechler, M., and Burklin, W., 1990:7)。ここに、「新しい社会運動」を支える人々の心理的メカニズムを捉える新しい概念が要請されることになった。

相対的剥奪論とは、社会運動の発生を説明するにあたって、人々の「不満」のもつ役割を重視する仮説である。社会運動とは、人々の現実の「充足水準」と規範的な「期待水準」との比較から生じるところの不満、すなわち「相対的剥奪」に起因する、というのがこの理論の基本的な考え方である。つまり、ある範囲の人々が、生活のための要件が満たされないという判定を下し、かつその判定が相対的剥奪のメカニズムと結び付くとき、社会的不満が起動し、運動発生心理的基盤を構成するというわけである。

相対的剥奪論は、相対的剥奪の形成メカニズムについて、二つの分析視角を用意している (松本, *ibid*:105-6)。一つは、社会の歴史的変動が相対的剥奪を形成するという視角である。この視角は、産業化、都市化による経済発展、およびそれにとまなう階級構造の変動、またこうした経済発展に対する政府の政策的対応などの一連の経済的、社会的、政治的変動が、期待水準と充足水準の均衡を乱し、そこである特定の人々が相対的剥奪を形成するという認識によって支えられている。もう一つは、社会構造内における諸集団の地位の格差が、ある特定の諸条件の下で、相対的剥奪を形成するという視角である。人々の感じる不満は、他の何らかの集団との比較によって相対的に形成される。「現存する準拠諸集団との比較を通じて、自分がより剥奪されていると判断するとき、やはり不満が生じやすい。相対的剥奪は正当的期待と現実との間の否定的乖離についての意識的な経験であって、準拠集団 (有意義な他者たち) はこの正当的期待の源泉をなすものなのである。このような経験の根底には、『各人の正味の報酬は彼の犠牲に比例すべきである』という＜分配的正義＞の原理が作用しているといつてよい」(塩原, *ibid*:341)。

さて、新しい社会運動を導く心理的要因や価値意識を相対的剥奪論によって捉えようとする際に議論的となるのは、脱産業社会における人々の欲求構造の変容に留意した場合、その分析視角が有効な運動というのはかなり限定されざるをえないという点である。すなわち、相対的剥奪論は、今みたように、基本的に運動の構造的基盤を経済的欲求の剥奪によって生成された階級や階層、社会的欲求の剥奪によって生成された地位諸集団に求めている。したがって、たしかに、過去の生活実績との比較 (通時的比較) や準拠集団との比

較（共時的比較）において、物質的富、様々な権利、社会的地位や機会などが不正に剥奪されている場合、この論理はかなりの程度あてはまるものとなる。しかしながら、エコロジーやフェミニズム運動に代表される新しいタイプの運動は、「既存の社会的政治的秩序から利益を得ている主に中産階級の運動なのである」（Dalton, R. J., Kuechler, M., and Burklin, W., *ibid*:7）。

同時に、新しい社会運動では、しばしば「生活の質」やライフスタイルの問い直しが問題になっているという点等が注目されているが、こうしたイシューの顕在化を相対的剥奪論の論理で説明するのは困難である。すなわち、第2に、相対的剥奪論にとっては、社会運動の動機づけとなる「不満」や「剥奪」は、共時的・通時的比較からでてくるといことしかいわれていないのであって、「不満」それ自体の質を問うことは出来ない。つまり、運動を支える価値や不満や欲求などの質的差異の問題はこの理論においては射程外におかれるのである。しかし、新しい社会運動の場合、「新しい不満の出現（appearance of new grievances）」（Klanderman, B., 1986:20）を掘り下げて検討すること無くしては、その問題性を明らかにすることができないのだ。

要するに、従来、人々が「要件不充足」の判定を下し、それが「不満」に結び付く媒介メカニズムについては「相対的剥奪」の理論が有力とされたが、しかし、新しい社会運動の場合は「脱物質的」価値形成の論理が、「不満」に結び付く媒介メカニズムとして注目されるようになってきているといえよう。

では、その「脱物質的」価値はどのようにして形成されるのか。これは、つぎの担い手の問題と絡んでくる。

（3）「脱物質的」価値と担い手論

イングルハートは「人格形成期」に経済的豊かさを経験したか否かが、脱物質的要求を実現しようとするかどうかの決め手になるとみている（「社会化仮説」）。すなわち彼は、新しい社会運動に参加したり共感をもつ人々は、人格形成期に物質的豊かさを経験し、「脱物質的」価値を身につけた人々であるという世代論を展開するから、新しい社会運動の参加者には中産階級が多いと考えるのである。

イングルハートは、中産階級の「中身」についてはこれ以上言及することはなかったが（Inglehart, R., 1990a）、この議論を拡大・発展させようとした論者のなかにコットグロブ&ドッフ（Cotgrove, S. and A. Duff, 1981）がいる。彼らは、調査からエコロジストには対人サービスの専門職（健康、教育、福祉関係）と芸術に携わる人がかなり多いということを発見している⁽⁶⁾。すなわち、「脱物質的」価値を実現しようという人々を中産階級そのものにもとめるのではなく、その階層の中の特定職業に注目したわけである。

すなわち、「諸価値のコンフリクト（物質的価値vs非物質的価値―筆者）に最もさらされており、それに最もよく気付いている人々は市場原理の外で働く人々であり、その職業とはすなわち、対人サービス業と芸術である。（…）非経済的価値にプライオリティを与える人々はこうした職業にこそ自分に相応しい環境を見出だすことができる。非経済的価値を訴える人々が、無謀な経済主義による破壊によって脅かされている環境の防衛に立ち上がれるのは、まさにこうした文脈によるのだ」（*ibid*:105）⁽⁷⁾。

彼らが、「非経済的」価値あるいは「非物質的」価値という表現をもちいている点には注意を要する。すなわち、新しい社会運動へと導くような価値の形成は、物質的豊かさの体験に起因するのではなく（たとえば、労働運動家よりも高額所得の企業家の方が物質的であったり、労働運動家は物質的、脱物質的価値の双方に高いポイントを与えていたりする）、対人サービスの専門職と芸術という職業の社会的性格に関連がある。だから「脱（post）物質的」価値という言い方は、誤解を招きやすいので「非(non) 物質的」価値という表現に改めるべきだ、というのである。

しかしながら、コットグローブらは、「脱物質的」価値は人格形成期に形成されるといってイングルハートの社会化仮説を採用し、しかも、「脱物質的」価値を実現したいと欲求する人々が対人サービスの専門職などの職業を選択する傾向がある、ということを受けている（ibid, 104）。だから、「non-」といってしまうことはそうした自らの見解に矛盾することにならないだろうか。コットグローブらは社会化仮説を認めているのだから、「脱物質的」価値の出所を職業に還元するような矛盾した見解に帰着させるのではなく、むしろ「脱物質的」価値が「今現在」強く欲求されたり、あるいはされなくなるような条件の一つとして、職業（の性格やそこで育まれる意識）を位置付けたほうが、論理的にすっきりしよう。

いうまでもなく、人格形成期に豊かさを経験した人すべてが現在、「脱物質的」価値を強く志向するわけではない。それらが今現在強く欲求され得ようになる条件にはどのようなものがあるのか。職業とはそうした条件の一つとしてみなされるべきものであり、そう考えれば、イングルハートの問いを今一步押し進めようとしたコットグローブらの試みは首尾一貫したものとなろう。

しかも、これを、どのような条件の下で人は運動に参加したり共感したりするようになるのか、という問いにまで広げれば、私的・公的ネットワークや政治的企業家等を重視する資源動員論とも接合可能となるであろう。新しい社会運動の参加者には中産階級や特定職業に従事する人が多いといっても、それは価値志向や活動に関わる資源が彼ら／彼女らに相対的に多いということを意味するにすぎず、実際の運動参加過程分析ということになれば、資源動員論的視角が不可欠であるからだ。

4. 「脱物質的」価値の再構成

みてきたように、「脱物質的」価値の概念は、①新しい社会運動の発生の背景説明として、②運動を支える新しい価値意識として、③運動の担い手論として、その分析に重要な役割を果たしてきたといえる。

そのことを認めた上でしかし、イングルハートが定義した“そのままの内容で”「脱物質的」価値を、新しい社会運動の価値観や態度を分析する概念としてもちいるには、次のような問題点を孕むがゆえに首肯できない。言い換えれば、イングルハートの定義で①～③を議論するのは不適切ではないか、ということである。どういうことか。

彼の『静かなる革命』あるいは『文化的シフト』（Inglehart, 1990b）での主張によれば、1960年代後半以降、先進産業社会の人々の価値意識や政治意識が物質的な豊かさよりも、精神的な豊かさを志向するようになったのであり、ゆえにこの変化は「物質的」価値から

「脱物質的」価値への転換と表現できる、ということであったが、ここで確認すべきは、「低次の欲求が満たされて始めて、より高次の欲求が現れてくる」というイングルハートが受け継いだマズローの論理である。このことはつまり、一旦、低次の欲求が充足されると、それ自体は言わば自明のことになるから、人々の欲求はより高次なものに向かう、ということを示している。別の言葉で言えば、人々の関心は経済の成長とともにより高次の欲求実現レベルに向けられるから、一旦充足された欲求は次第にその重要度を減じていく、ということである。

はたしてこの論理は、新しい社会運動を導く価値の説明として妥当なのか。この論理は、“このままでは” けっして新しい社会運動を導く価値の固有の説明たり得ない、と私は思う。

たとえば、これはいわゆる消費社会論の論理とも通底している。人々は今日、商品でなく必要からではなく差異で買う。車を持つということはいまどき当たり前であるから、関心の重点は、車を「持つ」ということから、「どのような」車を持つかという点に移っている、云々。すなわちこれは、かの『「分衆」の誕生』を説明する論理にもなっている。「いま、人々は自分の感性、嗜好、好き嫌いに忠実に生き始めている。人並みな暮らしを目指し、横並びを志向した大衆の時代を経て、再び人々はばらばらな生きかたを志向し始めている。ただ終戦直後の『ばらばら』とは異なり、いまの『ばらばら』は貧しさゆえに大衆として集まらない『ばらばら』ではない。あえて『集まらない』のである。他人と同じでは、気がすまないのである。つまり、これが『分衆の時代』なのだ。」（博報堂生活総合研究所編, 1985: 14）

もちろん、「脱物質的」価値と高度消費社会での「ばらばらの価値」＝「差異の価値」がまったく同じである、というのは極論である。イングルハートのいう「脱物質的」価値とは、美的（美しい町／自然）、知的（思想の重視、言論の自由）、帰属および評価の欲求（もっと非人間的でない社会、職場、地域社会でのもっと多くの発言権、政府に対するもっと多くの発言権）の達成のことであるからである。しかしながら、私が言いたいのは、彼の「脱物質的」価値の概念規定の仕方をみるかぎり、この概念規定の広さと一般性は、ある意味で消費社会における消費行動をも説明してしまうということである。したがってこの概念をそのまま借りてきて、新しい社会運動を導く固有の価値である、というのでは厳密な概念規定とはいえないと思う。この概念をエコロジー運動を初めとする今日の新しい社会運動を導く価値として使用するためには、マズロー→イングルハートと受け継がれてきた概念規定の仕方をそのまま持ち込むのではなく、概念規定をやり直す＝再定式化する必要があるのではないか。

さて、第2に、「低次の欲求が充足されると、それ自体は言わば自明のことになるから、人々の欲求はより高次なものに向かう」という論理は、単に消費社会の論理と共振するというだけではない。たとえば安全な食べ物を求める各種生協活動・消費者運動、原発の安全性に対する疑問の増大、あるいは高度成長そのものへの懐疑が発生する根本的理由それ自体を説明していない。なぜなら、これらは「脱物質的」価値の主張と言うよりは、「脱物質的」価値による「物質的」価値の捉え直しだからである。

すなわち、消費者運動や反原発運動であれば、従来の「安全」「科学」「経済成長」というものへの懐疑と批判、フェミニズム運動であれば「愛と帰属」「社会的承認」そのも

の内容と質の問い直し（両性問わず）など、いわば自らが今まで自明のうちに寄りかかっていた価値意識や欲求構造を反省的に捉え返すことが目指されているのである。その意味で、新しい社会運動に共有されている「脱物質的」価値や自己実現志向とは⁽⁸⁾、その志向が高まれば高まるほど、充足したと思われていたはずの下位の欲求に対する関心もますます強まる、という関係を含意したものであると考えねばならない。

しかるに、イングルハートの「脱物質的」価値は下位の欲求に対する反省関係をもっていない。つまり、下位の欲求に対する反省関係を問題にしていない、というかそれに無関心なのである。したがって、再定式化のポイントは、「上位の欲求は、下位の欲求を規定し直し、よって欲求構造そのものを再構成する」、これでなければならない。

くりかえせば、マズローからイングルハートへと引き継がれてきた「脱物質的」価値や「自己実現」といった概念は、下位の欲求との反省関係を欠き一旦獲得された欲求や価値を自明視した上で成立するものであり、われわれは、こうしたマズローの欲求段階説を根拠として導き出された概念を新しい社会運動に適用するわけにはいかない。

近代の歴史観が、歴史とは遅れた状態から、より進んだ状態へと進歩するものだ、という発想に疑いを入れなかったのと同様に、欲求段階説も「低次」の段階から「高次」の段階へと諸個人の欲求は進むものだという考えが基本的前提になっている。つまり、「物質的価値→脱物質的価値」も、不可逆的な一定方向の進化という発想を、その概念構築の基盤に据えているのであり、それは、近代社会に深く内属する思考様式に根拠をもつものといわねばならない。そして、その意味では決定的に「近代的」な概念であるといえる。よって、新しい社会運動を導く価値としてこの概念をもちいるのは適切ではない、といわざるを得ず、新しい社会運動の場合、「脱物質的」価値をいうのであれば、上で検討したような“物質反省主義”とでも呼ぶべき内容を同時に含むものとして考えるべきなのではないだろうか。

5. むすび

イングルハートの「脱物質的」価値という概念を、新しい社会運動を分析しようとする際に“そのままの形で”適用しようとするることによる問題点は、実は前で述べた点にとどまらない。この概念に従来向けられてきた最も痛烈な批判は、「脱物質的価値に基づく新しい運動は、第3世界を踏み台にして経済成長を成し遂げた、先進国内部でのみ成り立つ贅沢な運動にすぎない」というものである。

たとえば、庄司はこう述べている。「人種・民族的差別を基礎とし、何重にもそれを利用して造り上げられてきた世界的規模の巨大な階級・階層構造のピラミッドが、南側諸国を中心とする圧倒的な『大量貧困』として現象しているときに、一部『先進』諸国の脱物質主義がいったいどれだけの意味をもつであろうか」（庄司、1987:41）。

たしかに、イングルハートの議論をそのまま持ち込むかぎり、こうした批判はもっともなものといえよう。しかしわれわれが今まで検討してきたように、新しい社会運動に共有されている価値は、イングルハートの「脱物質的」価値そのものではない。それは、“物質反省主義”を含む＜脱物質的＞価値なのであり、一部「先進」諸国の中産階級に特異な「脱物質主義」ではないのである。熱帯雨林の破壊に対する意義申し立て、第3世界

への「公害輸出」反対運動、ODA批判、NGOの活発な活動等々は、こうした文脈においてでなければ理解することができない。その意味で、＜脱物質的＞価値に基づき「生活の質」を問い直す新しい社会運動は、先進産業国と第3世界との関係をも問い直し、新しい関係性の創造を模索しているのである⁽⁹⁾。矢沢が、I. ウォーラースティンの観点に着目して次のように述べるのも、要するにそういうことなのだ。

「ウォーラースティンは今日の先進資本主義国における社会運動とその文脈に関して、運動の危機と科学技術・文化の危機とが同時に進行していることを指摘し、それらを押し進めた要因として1960年代後半以降の対抗文化運動、エコロジー運動、文化革命などを重視している。また、今日の運動は、周辺、半周辺における『土着の代替物』を目指す内発的發展のための運動と、中心における脱-物質的価値に依拠する運動との統一としてあることを強調している。」(矢沢、1990:288)

以上、本稿は、「脱物質的」価値という概念を新しい社会運動論に引き付けて、その重要性和問題点を検討してきた。みたように、「脱物質的」価値という概念は、①新しい社会運動の発生する背景説明として、②運動を支える新しい価値意識として、③運動の担い手論への一アプローチとして、不可欠な役割を果たしてきたし、今後も運動論の焦点の一つであり続けるだろうことは間違いない。しかしながら、イングルハートの定義のままこの概念をもちいることは、運動の現状に妥当しないいくつかの問題点を発生させる、と考えられたので、後半ではその点を解決すべく新しい解釈を試みてみた。

「脱物質的」価値をめぐるのは、本稿で論じたのとは違った文脈からも様々な議論が提出されている。イングルハートの価値測定方法の妥当性といった問題(Flanagan, S. 1982)をも含め、今後の研究課題としたい。

注

(1) イングルハートは初期においては、materialistic values vs post-materialistic values ではなく、acquisitive values vs post-bourgeois values という用語を使用していたが、それ以後はほぼ前者に統一されている。

(2) 本稿は(渡辺、1990、第1章)で、十分に論じられなかった脱物質主義的価値の問題を今一步掘り下げて検討しようとするものである。

(3) もちろん、論者によって分類の仕方は様々存在する。たとえば、克蘭ダーマン(Klandermaans, B., 1986, 22-24)は5つに分けている(脱物質主義的価値からの説明、福祉国家論からの説明、マルクス主義的説明、非マルクス主義的説明、トゥレーヌ理論)。

(4) ハバーマスは「貨幣・官僚制の複合体の肥大化→生活世界の植民地化」という図式(つまり構造的側面)だけでは新しい社会運動の発生を説明できず、イングルハートの議論をもち出さざるをえなかった、と解釈できる。

(5) ケルボは、「危機の運動」(直接的に生存の脅かされるような社会経済条件下での運動)では、「豊饒の運動」と違って、心理的要因が重要な地位を占めるから、剥奪理論が有効な視点を供給することになるという(Kerbo, H. R., 1982)。しかし、後者に当たる新しい運動において、心理的要因が重要な役割を果たしていないなどということが、本当

にいえるのだろうか。相対的剥奪論などの不満、剥奪、信念を強調するアプローチという、従来有力な社会心理学的パラダイムが、新しい社会運動の分析に対してその切れ味が鈍るのは、ケルボのいうように「豊饒の運動」においては、心理的要因が重要な位置を占めなくなったからではないのであって、相対的剥奪というパースペクテヴの方が、新しい社会運動を導きそれを支える心理的要因を十分には分析できなくなったからだ、と考えるべきである。

(6) 彼らの研究については寺田(1986, 1990)から多くの示唆を得た。

(7) コットグローブらの扱った対象は、環境保護運動といった新しい運動の一つのタイプだが、グンデラッハやオッフエは、これをより一般化させている。すなわち、「非生産的サービス部門に属する人々」(Offe, C. 1985:833)、あるいは「新しい中間層(new middle layers)」(Gunderlach, P. 1984:1068-9)は、産業社会をより押し進めることからのメリットが少ない人々であるがゆえに、技術的、経済的、軍事的、政治的近代化をこのまま進展させることから生ずる危険や問題点にもっともセンシティブである。したがって、新しい社会運動一般に参加する傾向が強いというのである。

(8) ネットワーク型の新しい社会運動にみられる特徴を私はかつて、「一人称のわたしを自己主張した上で、わたしたちというものに行き着く在り方を大切にしていこうとする志向にある」ととらえ、それを<一人一人が主人公>主義と呼んだ。詳しくは(渡辺、1990)参照。

(9) たとえば、松井やより『市民と援助』、アジア市民フォーラム編『アジアの草の根ネットワークキング』など参照。

文献

- アジア市民フォーラム(編) 1990. 『アジアの草の根ネットワークキング』学陽書房。
- Cotgroove, S. and A. Duff 1980. Environmentalism, Middle Class Radicalism and Politics, Sociological Review, 28-2:333-51.
- 1981. Environmentalism, Value and Social Change, British Journal of Sociology, 32-1(March):92-110.
- Dalton, R. J., Kuechler, M., and Burklin, W. 1990. The Challenge of New Movements, in Dalton, R. J. and M. Kuechler(ed), Challenging the Political Order, Polity.
- Flanagan, S. 1982. Changing Values in Advanced Industrial Societies, Comparative Political Studies.
- Gunderlach, P. 1984. Social Transformation and New Forms of Voluntary Association, Social Science Information, 23-6:1049-81.
- Gurr, T. R. 1970. Why Men Rebel, Princeton.
- Habermas, J. 1981. Theorie des Kommunikativen Handelns, Band 2, Suhrkamp. 丸山高司(他訳) 1987. 『コミュニケーション的行為の理論(下)』未来社。
- 博報堂生活総合研究所(編) 1985. 『「分衆」の誕生』日本経済新聞社。
- Inglehart, R. 1977. The Silent Revolution, Princeton. 三宅一郎(他訳) 1978. 『静かな革命』東洋経済新報社。

- 1990a. Values, Ideology, and Cognitive Mobilization in New Social Movements, in Dalton, R. J. and M. Kuechler (ed), 1990.
- 1990b. Culture Shift, Princeton.
- Kerbo, H. R. 1982. Movements of "Crisis" and Movements of "Affluence," Journal of Conflict Resolution, 26.
- Klandermans, B. 1986. New Social Movements and Resource Mobilization, International Journal of Mass Emergencies and Disasters, 4-2.
- Maslow, A. H. 1954. Motivation and Personality, Harper & Row, N. Y. 小口忠彦（監訳）1971. 『人間性の心理学』産業能率大学出版部。
- 松井やより 1990. 『市民と援助』岩波書店
- 松本康 1985. 「相対的剥奪と社会運動」『思想』 737号, 102-123頁。
- 大畑裕嗣 1984. 「『集合行為論』の社会運動論への示唆」『社会学論考』 5号, 9-36頁。
- Offe, C. 1984. Contradiction of the Welfare State, Hunchinson.
- 1985. New Social Movements, Social Research. Vol. 52. No. 4.
- 佐藤慶幸（編） 1988. 『女性たちの生活ネットワーク —生活クラブに集う人々』文真堂。
- 塩原勉 1976. 『組織と運動の理論 —矛盾媒介過程の社会学—』新曜社。
- 庄司興吉 1987. 「知識・管理社会と社会運動」、栗原彬・庄司（編）『社会運動と文化形成』東京大学出版会 11-50頁。
- 曾根中清司 1970. 「相対的価値剥奪と社会運動」『行動科学研究』 7号, 1-16頁。
- 社会運動論研究会（編） 1990. 『社会運動論の総合をめざして—理論と分析』成文堂。
- 寺田良一 1986. 「現代産業社会批判と環境社会学」『社会学論考』 7号, 41-65頁。
- 1990. 「環境運動の類型と環境社会学」、社会運動論研究会編 1990, 63-93頁。
- 山口節郎 1985. 「労働社会の危機と新しい社会運動」『思想』 737号, 15-36頁。
- 矢沢修次郎 1990. 「世界社会化と社会運動」、古城利明（編）『世界社会のイメージと現実』、東京大学出版会 269-292頁。
- 渡辺伸一 1990. 「新しい社会運動（論）の展開」『社会学論考』 11号, 1-22頁。